

臨床研究部の活性化

国立病院機構では政策医療を展開するため全国 10 カ所に臨床研究センター、73 カ所に臨床研究部を設置し国立病院機構のスケールメリットを活かし、EBM 推進のための大規模臨床研究に取り組んで実績を上げています。また、各施設が独自のテーマで臨床研究を推進しその成果が数多く発表されています。各病院の臨床研究センター、臨床研究部は毎年業績で順位付けされ悪ければ入れ替えがあり臨床研究センターが臨床研究部に、臨床研究部は院内標榜の臨床研究部に格下げとなるようです。昨年度の高知病院臨床研究部の業績は例年に比べ少なく格下げになることは無いとはいえ、厳しい状況にあり今年度業績を増やすことが必須となっています。高知病院の臨床研究部は平成 12 年 10 月国立高知病院開院と同時に開設されましたが、そのとき臨床研究部を有する国立病院は 40 施設程度であったと記憶しています。当時、国立病院は政策医療を推進しており高知病院はリウマチ・アレルギー等疾患の基幹施設、成育医療、がん、重症心身障害、呼吸器の専門施設として位置付けられ、臨床研究部はこれらの疾患を中心に研究することが要求されていました。特にリウマチ・アレルギー疾患の分野については基幹施設でもあり積極的に取り組み培養細胞を用いた基礎研究も行っていました。途中から病院と政策医療との関係は疎になり EBМ や治験への症例登録が重要となり学会や論文の発表、倫理審査数など様々な項目で臨床研究部が評価され順位付けされるようになりました。中四国の機構病院の中で一番を目指す高知病院としては臨床研究部の成績も一番になりたいところですが、臨床研究は日常業務とは別に自らの時間を使って取り組まなければならないため、職員の積極性が反映されず。多くの業績を出している病院は臨床も高いレベルを維持している病院と評価されますが、業績を出すには臨床研究部長がいくら頑張っても限られた人のみでは限界があり全職員が意識して取り組まなければ不可能です。全員が同じ目標に向かって取り組むことで予想以上の力が発揮できることは何事においてもいえることで、今、ロシアで開催されているワールドカップでも選手が勝利という目標に向かって一丸となって戦っているチームがグループリーグを突破し決勝トーナメントに進んでいるようです。日本のサムライブルーはワールドカップの 2 ヶ月前にハルルホジッチ監督が解任され急遽西野朗監督が指名され準備段階の練習試合ではなかなか勝利できず期待薄の状態で大戦を迎えました。第一戦は格上のコロンビアで勝つのは難しいと思われていましたが終わってみれば 2:1 のスコアで日本の勝利となりました。アジアの国が南米のチームに勝ったのは初めてのことのようで、日本中の期待が急に高まり、その後のゲームではセネガルと引き分け、ポーランドには 1:0 と負けましたが、運も味方し決勝トーナメントに進むこととなりました。戦前の評価を覆す活躍をみせたサムライブルーの中で何が変わったかという質問に対し選手の一人が「チームが一つになったこと」をあげていましたが、臨床研究部の業績を増やすのも同じで病院職員の気持ちが一つにならねばなりません。ワールドカップのサムライブルーのように職員一丸となって国立病院機構の使命の一つである臨床研究の分野においても高知病院の実

力を発揮していきましょう。